

## 『大東世語』 「識鑒」 篇注釈稿

堀 誠

### 〔凡例〕

一、本稿は、服部南郭『大東世語』 「識鑒」 篇の本文と原注に関する注釈である。

注釈は、早稲田大学教育学部国語国文学科二〇〇七年度科目「特殊演習〇組」(堀 誠担当) の受講生(前嶋卓・上原菜摘子・青木悠・大関晶子・浅川有理・松本豊) がそれぞれ講読担当話の発表資料に基づいて原稿化した。

一、底本は、早稲田大学図書館蔵本『大東世語』(寛延三年へ一七五〇)刊に依り、また典拠に関しては同館蔵本『大東世語考』

(方寸菴漆鍋稿、寛延四年へ一七五一)序を参考にした。

一、「識鑒」篇の都合十六話を、「識鑒」のように順次表記した。

一、注釈は本文の「書き下し文」・「訳文」、原注の「書き下し文」・

「訳文」、および「語釈」、「典拠」から構成される。

『大東世語』 「識鑒」 篇注釈稿 (堀)

一、「書き下し文」は、原則として底本の訓点を尊重しつつ、適宜これを改めた。

### 〔識鑒 1〕

文徳帝。聞紀夏井名召見<sup>①</sup>。夏井衣履麤弊。左右咸嗤之。上曰。是疲駿也。非汝等所知。遂有殊寵。

### 〔書き下し文〕

文徳帝、紀夏井が名を聞きて召見す。夏井の衣履 麤弊なり。左右咸<sup>みな</sup>之れを嗤ふ。上曰はく、「是れ疲駿なり。汝等の知る所に非ず」と。遂に殊寵有り。

### 〔訳文〕

文徳天皇は、紀夏井の名声を聞き及んで召し出した。夏井が着ている衣服も履物も粗末でいたんでいた。左右の廷臣たちは皆これを笑った。すると、帝は言った、「疲れた駿馬である。お前達には分かるまい」

と。かくして、夏井はとりわけ寵遇された。

〔原注〕

①夏井。美濃守紀善岑之子也。身體雄偉。眉目清朗。爲人溫雅。又有「才思」。學「書野篁」。既而野歎曰。紀三郎可謂「眞聖」。又從「伴勝雄」習「圍碁」。工已過「師」。文德帝與「宮人」戲「藏鉤」。令「夏井」射之。夏井曰。小女青衣而簪「白花」者左手中有之。帝乃得之大喜。又精「醫藥」。後在「土州」。山澤所<sub>レ</sub>在。采<sub>レ</sub>藥救<sub>レ</sub>民。人多得<sub>レ</sub>效驗。

〔書き下し分〕

①夏井、美濃の守紀善岑の子なり。身體雄偉、眉目清朗にして、人と爲り溫雅なり。又た才思有り。書を野篁に學ぶ。既にして野歎じて曰はく、「紀三郎は眞聖と謂ふべし」と。又た伴勝雄に従ひ圍碁を習ふ。工なること已に師を過ぐ。文德帝、宮人と藏鉤を戯る。夏井をして之れを射らしむ。夏井曰はく、「小女の青衣にして白花を簪<sub>かざ</sub>す者の左手の中に之れ有り」と。帝乃ち之れを得て大いに喜ぶ。又た醫藥に精<sub>こま</sub>し。後に土州に在り。山澤の在る所、藥を采り民を救ふ。人多く效驗を得たり。

〔訳文〕

①夏井は、美濃の守の紀善岑の子だった。身付は立派で威嚴に満ち、眉目清朗で、性格は溫厚典雅だった。又、才能もあった。小野篁に書を學んだ。小野篁が感心して言った、「紀三郎は本物の聖人といえる」と。又、伴勝雄について圍碁を習った。實力はすでに師

を超えていた。文德帝は官吏たちと藏鉤の遊びをなさった。夏井にこれをあてさせた。夏井は言った、「青い衣を着た小女で、白花を簪<sub>かざ</sub>にしている者の左手の中にあります」と。帝はそれを聞いて大いに喜んだ。又、医藥に詳しかった。後に土佐に流され、山沢の到る所で藥を採集し、民衆を救った。多くの効き目があった。

〔語釈〕

文德帝 文德天皇。八二七〜八五八。第五十五代。仁明天皇の第一皇子。母は太皇太后藤原順子。嘉祥三年（八五〇）即位。性格は溫恭、政治に心を費やした。しかし體質が弱く、政治は多く藤原良房によってなされた。

紀夏井 善岑の子。書を小野篁に学び、特に隸書に秀でていた。性格は溫厚で、圍碁も巧く、医術にも通じていた。文德天皇の特別の寵愛を受け、天皇の崩御の後には、讃岐国の国司となった。農業に力を入れて收穫量が増し、任期満了の際には農民達から慰留され、更に数年間在任した。貞観七年（八六五）には肥後の国司となり人々から信頼を得るが、応天門の変に連座し、土佐国に流された。

紀善岑 生没年未詳。紀夏井の父。美濃の守。

野篁 小野篁。八〇二〜八五二。文学者。參議岑守の子。承和三年（八三二）遣唐副使となったが、大使藤原常嗣の専横に憤り病と称して命を奉ぜず、隱岐に流された。二年にして召還され、刑部大輔、藏人頭を経て參議となった。『令義解』の編纂に参

与。和歌にすぐれ、書をよくした。

伴勝雄 大伴勝雄。七七五〜八三一。弟麻呂の子。陸奥守兼按察使を務めた。

藏鉤 中国から伝わった遊戯の一つ。二組に分かれ、一方の組の者が握りこぶしを出し、その中の一人が物を握っているのを、他の組の者が言い当てる。

土州 国名。土佐。

〔典故〕

『日本三代實錄』卷十三。貞觀八年九月廿二日。 (前篇 卓)

### 〔識鑒2〕

藤太秀卿①。聚強族<sup>マヤ</sup>在東。聞平將門興<sup>マヤ</sup>②。初欲與<sup>マヤ</sup>之。詣見。將門方梳髮。遽喜出迎。髮不遑<sup>マヤ</sup>理。衣不及<sup>マヤ</sup>更。藤太心已小<sup>マヤ</sup>其躁無<sup>マヤ</sup>量。既而饌至對<sup>マヤ</sup>食。將門下箸。飯迸落汚<sup>マヤ</sup>袴。輒看自拂拭。藤罷謂<sup>マヤ</sup>人曰。將門小豎子耳。安足<sup>マヤ</sup>與圖<sup>マヤ</sup>大事。遂反伐滅<sup>マヤ</sup>之。

〔書き下し文〕

藤太秀卿、強族を聚めて東に在り。平將門興ると聞き、初め之れに與せんと欲し、詣り見る。將門方に髪を梳る。遽に喜びて出でて迎ふ。髪理むるに遑あらず、衣更ふるに及ばず。藤太の心已に其の躁にして量無きを小なりとす。既にして饌至りて對食す。將門 箸を下すとき、飯迸り落ちて袴を汚す。輒ち見て自ら拂拭す。藤罷りて人に謂ひて曰はく、「將門は小豎子のみ。安くんぞ與に大事を圖るに足らん

や」と。遂に反り伐ちて之れを滅す。

### 〔訳文〕

藤太秀郷は、強力な豪族を集めて東国にいた。平將門が立ち上がったと聞いて、初めはこれに与したいと思い、会いに行った。將門はちょうど髪を梳っていたが、にわかに喜んで秀郷を出迎えた。髪を整えるひまもなく、衣は変えていなかった。藤太は心の中で、將門が落ち着かず度量がないのを卑しんだ。やがてごちそうが運ばれてきて向かい合つて食事をした。將門が箸を下したとき、飯がこぼれ落ちて袴を汚した。そのたびごとに將門はそれを見て自分自身で払いぬぐった。秀郷は退出して人にこう言った、「將門はただの青二才だ。どうしてともに重大なばかりごとをするのに十分な人物であろうか」と。結局帰るとこれを攻め滅ぼした。

### 〔原注〕

①左大臣藤原名之裔。河内守村雄之子。爲武藏守。唱義討平將門。遂克斬之。以功受賞下野州。因稱田原。  
②將門。鎮守府將軍平良將之子。承平中。據總州相馬城反。自立稱王。置設百官。威震關東。藤太秀卿與平貞盛戮力攻之。斬將門。傳首京師。與黨皆平。

〔書き下し文〕

①左大臣藤原名之裔、河内守村雄の子なり。武藏守と爲る。義を唱へて平將門を討つ。遂に克く之れを斬る。功を以て下野州を受賞す。因りて田原と稱す。

②將門は、鎮守府將軍平良將の子なり。承平中、總州相馬城に據りて反く。自ら立ちて王と稱し、百官を置き設く。威は關東に震るふ。藤秀卿と平貞盛は力を戮せて之れを攻む。將門を斬りて、首を京師に傳ふ。黨と皆平ぐ。

〔訳文〕

①左大臣藤原魚名の末裔。河内守村雄の子。武藏の守となった。正義を唱えて平將門を討ち、ついに將門を斬り倒した。この功績で下野の国を恩賞として受け、田原を称した。

②將門は、鎮守府將軍 平良將の子である。承平年間に、総州相馬城を拠点として反乱を起こした。自ら立って王と自称し、もろもろの役官を設置した。その勢いは關東を脅かした。藤原秀郷と平貞盛は力を合わせてこれを攻めた。將門を斬って首を都に送り、その一党を皆平定した。

〔語釈〕

藤太秀卿 藤原秀郷。「卿」の字は「郷」の誤刻。生没年未詳。平安中期の鎮守府將軍。下野押領使として平將門の乱を鎮圧、その功によって下野守となった。東国武士の小山・結城・下河辺氏の祖。別名は田原藤太。幼い頃京都の近郊の田原の地に居住していたことから「田原（俵）藤太」と呼ばれたという説もある。藤魚名 藤原魚名。七二一〜七八三。奈良時代の貴族。北家藤原房前の五男。

強族 強力な豪族。

平將門 ？〜九四〇。平安中期の武將。父は良持とも良將とも。承平

五年（九三五）所領争いなどから叔父国香を殺し、天慶二年（九三九）別館を下総猿島に建てて文武百官を置き、自ら新皇と称し關東に威を振るったが、平貞盛・藤原秀郷に討たれた。

平將門興 ここでは、天慶二年（九三九）平將門が關東に兵を挙げたことをいう。平將門の乱。同時期の藤原純友の乱とともに承平・天慶の乱という。

鎮守府將軍 古代、蝦夷地経営のために陸奥国に置かれた軍政府の長官。平安中期以降、武門の最高榮譽職とされた。

平良將 ？〜九一八。平安中期の武將。「良持」とする記録もある。桓武平家の祖、高望王の子。兄は国香、良兼。子は將門、將頼、將平。下総国を本拠地とし、武家平家の実質的な祖とされる。

鎮守府將軍。

相馬 福島県北東部の市。もと相馬氏の城下町。

城 要塞。とりで。

百官 もろもろの役人。

平貞盛 生没年未詳。平安中期の武將。国香の子。父が平將門に殺され、天慶三年（九四〇）藤原秀郷の協力を得て將門を討った。京師 天子の住む都。「京」は大、「師」は衆の意で、多くの人のいる所の意。

黨 悪いなかま。一味。

理 おさめる。ととのえる。つくろう。



違 ひま。ここでは、「いとまあり」と訓じて動詞。

遽 にはかに。急に。

躁 おちつきがない。

量 度量。器量。能力。人物。

饌 供え物。供えた飲食物。ごちそう。

對食 向かい合って食事をする。

小豎子 青二才。人を見下したり卑しめたりするときの言葉。

圖 はかりごとをする。

伐 敵を討つ。悪者を攻める。

〔典故〕

『吾妻鏡』「治承四年九月十九日」。

(上原 菜摘子)

〔識鑒3〕

平將門在京。候吏部王①第歸。平貞盛②後至。遇門。一呵而過。

既而謂王曰。屬不具兵。不克殺豎子。恨爲國家遺患爾。後

將門果作逆。

〔書き下し文〕

平將門 京に在るとき、吏部王の第に候して歸る。平貞盛 後に至りて、門に遇ふ。一呵して過ぐ。既にして王に謂ひて曰く、「屬たま兵を具せず。豎子を殺すことを克せず。恨くは國家の爲に患ひを遺すのみ」と。後に將門果たして逆を作す。

〔訳文〕

平將門が京にいたとき、吏部王の邸に伺候して歸った。平貞盛がその後からやって来て、門で出遇った。一目見て通り過ぎた。その後で王に言うことには、「折悪しく兵を連れていましてしたので、あやつを殺害することが出来ませんでした。残念ながら國家の爲に厄介を残すことになりました」と。後に將門は果たして反乱を起こした。

〔原注〕

①敦實。宇多帝之子。一品式部卿。

②鎮守府將軍國香之子。將門從兄也。

〔書き下し文〕

①敦實なり。宇多帝の子、一品式部卿なり。

②鎮守府將軍國香の子なり。將門の從兄なり。

〔訳文〕

①敦實のことである。宇多帝の子で、一品式部卿となった。

②鎮守府將軍國香の子で、將門の從兄である。

〔語釈〕

平將門 〔識鑒2〕〔語釈〕「平將門」参照。

吏部王 式部卿の唐名。ここでは重明親王を指す。

平貞盛 〔識鑒2〕〔語釈〕「平貞盛」参照。

呵 横目で見る。流し目で見る。

屬 たまたま。

宇多帝 宇多天皇。第五十九代天皇。光孝天皇の皇子。名は定省。親政を行おうとしたが、関白藤原基経に阻まれた。基経の死後は

菅原道真を起用して摂関政治の弊害を改めるのに努めた。後に出家して寛平法皇・亭子院と称した。

平國香　？～九三五。平安中期の武将。高望王の子。常陸大掾鎮守府將軍に任ぜられ、東国に土着。甥の将門と争い、殺された。

〔典故〕

『今昔物語集』卷第二十五「平将門発謀叛被誅語第一」。（青木　悠）

〔識鑒4〕

天曆帝。令<sub>レ</sub>江朝綱①菅文時各擇<sub>二</sub>白集壓卷詩一首<sub>一</sub>。別封上<sub>上</sub>。帝啓<sub>レ</sub>之。則同采<sub>二</sub>送<sub>二</sub>蕭處士遊<sub>二</sub>黔南之作<sub>一</sub>。帝歎曰。卿等鑒識。何乃符合②。

〔書き下し文〕

天曆帝、江朝綱・菅文時をして各おの白集の壓卷の詩一首を擇びて、別に封上せしむ。帝之れを啓けば、則ち同じく「蕭處士の黔南に遊ぶを送る」の作を采る。帝歎じて曰く、「卿等の鑒識、何ぞ乃ち符合せる」と。

〔訳文〕

天曆帝は、大江朝綱と菅原文時にそれぞれ白氏文集の中で圧巻と思われる詩を一首選ばせ、別々に封をして献上させた。帝が開いてみると、二人とも「蕭處士が黔南に遊ぶを送る」という詩を選んでゐた。帝は感嘆して言った、「あなた方の物を見る目は、どうして符合したのか」と。

〔原注〕

①江相公音人之孫。少納言玉淵之子。能登守。  
②江每語<sub>レ</sub>人曰。後來必以<sub>二</sub>吾與<sub>レ</sub>菅爲<sub>二</sub>一雙<sub>一</sub>。

〔書き下し文〕

①江相公音人の孫、少納言玉淵の子なり。能登守なり。  
②江　毎に人に語りて曰く、「後來必ず吾と菅とを以て一雙と爲さん」と。

〔訳文〕

①江相公音人の孫で、少納言玉淵の子である。能登守である。  
②大江朝綱は常々人に語って言った、「将来はきっと私と菅原文時とを、一対の者とみなすだろう」と。

〔語釈〕

天曆帝　村上天皇。九二六～九六七。醍醐天皇の十四皇子。母は藤原基経の娘中宮穩子。後世、天曆の治と称される。

江朝綱　大江朝綱。八八六～九五七。平安中期の漢詩人、学者。中国

古典に精通し、村上天皇の勅命により『新国史』を撰進した。

民部卿、文章博士、左大弁を歴任、参議に至る。祖父音人の江

相公に対して、後江相公と呼ばれる。〔言語23〕〔語釈〕〔朝綱〕

参照。

音人　大江音人。八一～八七七。平安前期の文文学儒。江家の始祖。

〔德行5〕〔語釈〕〔江音人〕参照。

玉淵　大江玉淵。

菅文時 菅原文時。八九九〜九八一。平安中期の儒者。道真の孫で、

高視の子。実学である文章道に名を挙げ、源為憲や大江匡衡らの文人もその添削を請うた。〔言語23〕〔語釈〕〔文時〕参照。

白集 『白氏文集』を指す。

送蕭處士遊黔南 白居易の七言律詩の詩題。詩句は以下の通り。

能文好飲老蕭郎 文を能くし飲を好む老蕭郎。

身似浮雲鬢似霜 身は浮雲に似て 鬢は霜に似たり。

生計拋來詩是業 生計 抛ち来りて詩は是れ業。

家園忘却酒爲郷 家園 忘却して酒を郷と爲す。

江從巴峽初成字 江は巴峽より初めて字を成し、

猿過巫陽始斷腸 猿は巫陽を過ぎて始めて腸を斷つ。

不醉黔中爭去得 醉はずんば黔中に争か去り得ん。

磨圍山月正蒼蒼 磨圍山月 正に蒼蒼。

〔典拠〕

『古今著聞集』卷四 文學「天曆の御時、大江朝綱・菅原文時に白氏文集第一の詩をえらばしめ給ふ事」。

（大関 晶子）

〔識鑒5〕

栗田公在衡①。才學不<sub>レ</sub>必廣博<sub>一</sub>。而前識過<sub>レ</sub>人。每有<sub>二</sub>帝問<sub>一</sub>、應對明詳。聚<sub>二</sub>據典<sub>一</sub>故<sub>一</sub>。未<sub>二</sub>嘗有<sub>レ</sub>窮<sub>一</sub>。每<sub>二</sub>朝上<sub>一</sub>。車中行且披覽<sub>一</sub>書<sub>一</sub>。及<sub>二</sub>入承<sub>二</sub>顧問<sub>一</sub>。必其書事也。又恪勤見<sub>レ</sub>稱。一日風雨甚。衛士相謂。設是在衡。恐不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>參。言未<sub>レ</sub>畢。雨衣滲漚。衛冒乃至。

『大東世語』「識鑒」篇注釈稿（堀）

〔書き下し文〕

栗田公在衡、才學は必ずしも廣博ならず。而して前識 人に過ぐ。帝問有る毎に、應對明詳なり。典故を<sub>かくも</sub>據し、未だ嘗て窮すること有らず。朝上する毎に、車中行<sub>ゆく</sub>且つ一書を披覽す。入りて顧問を承るに及びて、必ず其の書の事なり。又恪勤稱せらる。一日風雨甚だし。衛士相謂はく、「設し是れ在衡も、恐くは參すべからず」と。言未だ畢らざるに、雨衣滲漚して、衛冒して乃ち至る。

〔訳文〕

栗田公在衡は必ずしも幅広い知識を持っていたわけではなかったが、有職故実<sub>（きやくこじ）</sub>は人より優れていた。帝が何か尋ねるたびに的確な返答をした。過去の典故を調べて確認し、答えに窮することはなかった。朝宮中に参内するときに、車中である書物を開いてみる。宮中に入って帝から尋ねられることは、必ず来るときに見てきた書物にある事柄だった。また（栗田殿は）律儀な仕事ぶりを讃えられていた。ある日、雨風が激しい日があった。衛士たちは互いに、「栗田殿であつたとしても、来ることはできないだろう」と話した。そう言い終わらぬうちに、雨よけの着物をびしょぬれにして、悪天候についてお見えになった。

〔原注〕

①中納言藤山蔭之孫。但馬守有頼之子。字藤文。以學累進。仕<sub>二</sub>天慶時<sub>一</sub>。及<sub>二</sub>圓融帝<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>左大臣<sub>一</sub>。薨年七十九。號曰<sub>二</sub>栗田<sub>一</sub>。

〔書き下し文〕

①中納言藤山蔭の孫、但馬守有頼の子なり。字は藤文なり。學を以

て累進す。天慶の時に仕ふ。圓融帝に及んで、左大臣に至る。薨年七十九。號して「粟田」と曰ふ。

〔訳文〕

①中納言藤原山蔭の孫、但馬守有頼の子である。字は藤文。學問によつて昇進を重ねる。天慶年間に仕え、圓融帝の時に左大臣に昇進した。享年七十九歳。粟田と号した。

〔語釈〕

粟田公 藤原在衡。八九二〜九七〇。天慶四年（九四二）參議となり、安和二年（九六九）、安和の変によつて右大臣となる。天祿元年（九七〇）左大臣となる。粟田左大臣、あるいは万里小路大臣とも呼ばれた。

藤山蔭 藤原山蔭。八二四〜八八八。清和天皇の側近。從三位中納言、民部卿に至る。

有頼 藤原有頼。從五位下但馬守。

前識 有職故実。

広博 學問の知識などがひろいこと。

覈據 しらべ、たしかめる。「覈」は、調べる。「據」は、よりどころにする。

披覽 ひらいてみることに。

顧問 問う。相談する。元は天子が臣下を顧みて意見を問うこと。

恪勤 つつしみ勤める。

設 もし。仮定。

雨衣 雨よけの着物。

滲瀝 漏れ滴ること。

衝冒 つきおかすこと。

〔典故〕

『古事談』卷六―三十三話「在衡、精勵ノ事」（第四二一話）。

『十訓抄』第六―二十八話。

（浅川 有理）

〔識鑒 6〕

丹後大守藤保昌還任。與佐山中。遇白髮武人乘匹馬者。狀頗矍鑠。見大守來。引避樹後。傾笠駐立。導騎尤其不下。乃欲訶之。保昌止之曰。第往。此翁非凡。其駐馬之形。甚有舊將風。既過。復遇故衛尉平致經。多率徒屬行。致經乃迎揖。且問曰。先有二老當過。田舍翁。寧復無失禮於大守邪。是僕父耳。乃別。保昌顧從者曰。向翁即平致賴也。汝曹殆且失誤①。

〔書き下し文〕

丹後大守藤保昌 任に還る。與佐の山中、白髮の武人の匹馬に乗る者に遇ふ。狀頗る矍鑠たり。大守の來るを見、引きて樹後に避け、笠を傾けて駐立す。導騎其の下りざるを尤めて、乃ち之れを訶せんと欲す。保昌 之れを止めて曰はく、「第往け。此の翁凡に非ず。其の馬を駐むるの形、甚だ舊將の風有り」と。既に過ぐ。復た故の衛尉平致經の、多く徒屬を率ゐて行くに遇ふ。致經乃ち迎へ揖し、且つ問ひて曰はく、「先に二老有り當に過ぐべし。田舍の翁、寧ろ復た禮を大守

に失すること無からんや。是れ僕が父のみ」と。乃ち別る。保昌 從者を顧みて曰はく、「向<sup>さま</sup>の翁は即ち平致頼なり。汝が曹殆んど且つ失誤せん」と。

#### 〔訳文〕

丹後太守藤原保昌は任国に帰った。与佐の山中で、白髪<sup>しらげ</sup>の武人で馬に乗る者に会った。姿は非常に元気できびきびとしていた。太守が来るのを見て、馬を導いて木の後ろに避け、笠を斜めに傾けてそこにとどまっていた。先導する騎馬武者は、その武人が馬から下りないのをとがめて、叱咤しようとした。保昌は押し止めて言った。「そのまま進め。この翁はただ者ではない、その馬をとめている姿には武将であった風格がある」と。こうして通り過ぎると、元の左衛門尉である平致経が多数の軍兵を率いて行くのに出会った。致経は迎えて挨拶し、あわせて尋ねて言った、「私の前に一人の老人を通り過ぎてきたはずです。田舎者の翁ですが、大守様に無礼を致しませんでしたでしょうか。その者こそ私の父であります」と。かく挨拶して致経は別れた。保昌は從者達の方を振り返って言った、「先程の翁はまさしく平致頼殿であった。お前達はもう少しで無礼をはたらくところであった」と。

#### 〔原注〕

①源頼信。藤原保昌。平維衡。平致頼。世稱「四雄」。皆數著「武功」。

#### 〔書き下し文〕

①源頼信、藤原保昌、平維衡、平致頼、世に四雄と稱す。皆數<sup>しばしば</sup>功を著す。

#### 〔訳文〕

①源頼信、藤原保昌、平維衡、平致頼は、世に四雄と称えられる。皆たびたび戦いで手柄をあげている。

#### 〔語釈〕

丹後 地名。旧国名。今の京都府の北部。

藤原保昌 藤原保昌。九五八〜一〇三六。父は藤原致忠。母は元明親王の娘。弟に盜賊として名高い藤原保輔がいる。藤原南家に属し、女流歌人の和泉式部の夫。丹後守・摂津守・山城守・肥前守・日向守を歴任した。また藤原道長・頼通父子の家司も務めている。武勇に秀で、『今昔物語集』の盜賊「袴垂」（保輔と同一人物と言われる）との説話でも有名である。〔雅量4〕〔語釈〕「藤原保昌」参照。

平致経 生没年不詳。平致頼の子。大箭左衛門尉と称された武勇の士。歌にすぐれ、詞花和歌集に一首みえる。名は致恒とも書く。

平致頼 ？〜一〇一一。平公雅の子。伊勢の所領をめぐり、同族の維衡と争うが隱岐に流される。通称は平五大夫。

躰鑠 老人がきびきびと元気に振る舞うさま。

導騎 先導する騎馬。

失誤 あやまちをおかす。

四雄 藤原道長に仕えた「道長四天王」藤原保昌・源頼信・平維衡・平致頼。『十訓抄』には優れた武士として、「この四人がもし互いに相争うのならば必ず命を失うはずだ」と書かれている。

源頼信 九六八—一〇四八。源満仲の三男。源頼光や源頼親の弟。武人としての逸話が今昔物語集にみえる。平忠常の乱を戦わずして鎮圧。

平維衡 生没年不詳。平貞盛の四男。伊勢守を務め伊勢平氏の祖となった。

〔典故〕

『宇治拾遺物語』第一三五話。

（松本 豊）

〔識鑒7〕

御堂相公出塗。見小童逐駄馬。行且披書。乃令近前視之。果具奇骨。目有重瞳。公乃取資給。令就江匡衡①專學。後遂作名士。廣才博覽。無不兼綜。又傳修養方。有壽考稱。即江學士時棟也。

〔書き下し文〕

御堂相公 塗に出づ。小童の駄馬を逐ひて、行ゆく且つ書を披くを見る。乃ち近前せしめて之を視るに、果たして奇骨を具す。目に重瞳有り。公乃ち取りて資給し、江匡衡に就きて専ら學ばしむ。後に遂に名士と作る。廣才博覽、兼ねて綜べざること無し。又た修養方を傳へて、壽考の稱有り。即ち江學士時棟なり。

〔訳文〕

御堂関白（藤原道長）が外出した時、馬を追いなから書物を広げて読んでいた子供を目にした。近くに寄らせて、よく見ると、果たして優

れた骨相を備え、瞳の中にもう一つの瞳があった。道長は子供を引きとって生活の費用を支給し、大江匡衡の元で学問に専念させた。後にはついに名だたる学士となった。広い学才と広い見識を備え、習い修めのないものはなかった。また養生の法を伝え、長寿の評判が高かった。この人こそが学士の大江時棟である。

〔原注〕

①匡衡見後。

〔書き下し文〕

①匡衡 後に見ゆ。

〔訳文〕

①匡衡は後に出てくる。

〔語釈〕

御堂相公 藤原道長。九六六—一〇二七。平安時代の政治家、摂政太政大臣従一位。関白兼家の第五子。詩歌の道に巧みであった。伊周と権力を争い、伊周を左遷した。後に出家し、法成寺を建立した。〔德行8〕〔語釈〕「御堂公」参照。

出塗 外に出かけること。「塗」は道の意。

江匡衡 大江匡衡。九五二—一〇二二。漢学者で歌人。七歳で書を読み、九歳で詩を賦した。博学であり、甲斐権守などに命ぜられ、三十八歳で文章博士となった。詩集に『江吏部集』、歌集に『大江匡衡朝臣集』がある。〔言語16〕〔語釈〕「匡衡」参照。

奇骨 普通の人とは違った骨相。

重瞳 一つの目に瞳が二つあること。帝舜や楚の項羽がそうであったと相承される優れた人物の相。

資給 貨財をめぐみ与えること。

無不兼綜 「綜」はおさめる意。

修養方 養生の法、撰生の法。

壽考 寿、命が長い。長寿。

時棟 大江時棟。生没年不詳。平安朝時代の文章家。摂政道長が匡衡に子として養わせた。經史子集に通じていた。河内、三河等の守を歴任した。

〔典拠〕

『十訓抄』第三十四話。

(前寫 卓)

〔識鑒 8〕

源左府雅信①少時。平納言時望②。詣其父吏部王③。見雅信。謂王云。位官竝極高。願以下官子孫託之。後果如其言。時望已卒。左府以其知已言。爲其孫惟仲。每事保存。

〔書き下し文〕

源左府雅信少き時、平納言時望、其の父吏部王に詣る。雅信を見て、王に謂ひて云ふ、「位官竝びに極めて高からん。願はくは下官が子孫を以て之れに託せん」と。後に果たして其の言の如し。時望已に卒して、左府其の己を知る言を以て、其の孫惟仲が爲めに、每事保存す。

〔訳文〕

源左大臣雅信が若い時、平納言時望が雅信の父である吏部王を訪問した。雅信を見て、吏部王にこう言った、「位も官職もいずれも極めて高くおなりになるだろう。どうか私めの子孫をこの方に託したい」と。後に果たしてその言葉の通りとなった。時望がすでに亡くなってから、左大臣（雅信）は時望が雅信自身の立身を見抜いた言葉によって、（時望の願いに違わず）彼の孫惟仲のために万事にわたって力添えをした。

〔原注〕

① 一條左大臣。

② 惟範之子。

③ 親王敦實。

〔書き下し文〕

① 一條左大臣なり。

② 惟範の子なり。

③ 親王敦實なり。

〔訳文〕

① 一條左大臣である。

② 惟範の子である。

③ 敦実親王である。

〔語釈〕

源雅信 九二〇〜九九三。敦実親王の子。参議、左大臣を歴任、從一位に至る。一條左大臣、鷹司殿と呼ばれ、名臣の評判が高かつ

た。〔政事2〕〔語釈〕「源雅信」参照。

平時望 八七七〜九三八。平惟範の子。延喜八年（九〇八）参議とな

る。その後、従三位、中納言に進み中宮大夫を兼ねた。〔政事

3〕〔語釈〕「時望」参照。

惟範 平惟範。八五五〜九〇九。累進して従三位、中納言兼右近衛大

将となる。文才に富み詩人としても活躍。また『延喜格』の編

集に参加した。

吏部王 式部卿の唐名。ここでは敦実親王を指す。

親王敦實 敦実親王。八九三〜九六七。宇多天皇の第八皇子。宇多源

氏の祖。中務卿、式部卿を歴任。出家後は仁和寺に住む。和歌、

管弦、蹴鞠などをよくし、源家音曲の祖と言われた。

下官 役人の謙称。

惟仲 平惟仲。九四四〜一〇〇五。平珍材の長男。藤原兼家に拔擢さ

れて参議、中納言に進み、長保三年（一〇〇一）大宰権帥。同

五年、従二位にのぼるが、宇佐八幡宮の中の反惟仲派と衝突し

て訴えられ、権帥を解任された。〔政事3〕〔語釈〕「惟仲」参

照。

保存 失わぬよう大切に保っておく。『漢語大詞典』によれば、愛護・

保全の意。『世説新語』方正篇に「蘇峻時、孔羣在横塘、爲匡

術所逼。王丞相保存術。」の用例がある。

〔典拠〕

『江談抄』第二「平中納言時望相一條左大臣雅信事」。（上原 菜摘子）

〔識鑒9〕

平珍材①。爲<sub>レ</sub>介<sub>レ</sub>讃州<sub>二</sub>時<sub>一</sub>。納<sub>レ</sub>婦生<sub>二</sub>惟仲<sub>一</sub>。後惟仲與<sub>レ</sub>母俱來<sub>二</sub>京<sub>一</sub>。珍

材見<sub>レ</sub>輒曰。兒當<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>亞相<sub>一</sub>。但復有<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>貪損<sub>一</sub>。他日宜<sub>レ</sub>慎。惟仲作<sub>二</sub>太

宰帥<sub>一</sub>。坐<sub>レ</sub>事中廢。後復作<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>。

〔書き下し文〕

平珍材、讃州に介<sub>す</sub>爲る時、婦を納めて惟仲を生む。後に惟仲 母と俱

に京に來たれり。珍材見て輒ち曰はく、「兒當に亞相に到るべし。但

だ復た貪を以て損すること有らん。他日宜しく慎むべし」と。惟仲

太宰帥と作る。事に坐して中ごろ廢す。後に復た大納言と作る。

〔訳文〕

平珍材が讃岐次官になった。婦人<sub>ま</sub>を娶って、惟仲が生まれた。後に惟

仲は母親とともに都にやって來た。珍材は、会うとすぐさまこう言っ

た、「お前は<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>にまで至るだろう。ただ欲深さのために損をする

ことがあろうから、将来慎むがよろう」と。その後、惟仲は大宰府

の長官となったが、事件に連座して途中で官を廢され、後にまた大納

言となった。

〔原注〕①時望之子。

〔書き下し文〕①時望の子なり。

〔訳文〕①時望の子である。

〔語釈〕

平珍材 生没年不詳。父は従三位であった平時望。〔政事3〕〔語釈〕



参照。

平時望〔識鑒8〕〔語釈〕「平時望」参照。

讃州 讃岐の国の別称。現在の香川県。

介 すけ。四等官で国司の第二位。守の次の位。昔の地方官の一つ。

納婦 「納」は、入れる、妻を迎えること。「婦」は、おんな、婦人。

平惟仲 〔識鑒8〕〔語釈〕「惟仲」参照。

兒 子ども。ここではわが子を呼んだ語。惟仲を指す。

亞相 大納言の唐名。

他日 後日。将来。

太宰帥 大宰府の長官。

坐事 事件がもとで罪になること。連座すること。

中廢 途中で官職を廃されること。

〔典拠〕

『江談抄』第二「平家自往昔為相人事」。

（青木 悠）

### 〔識鑒10〕

承保中。詔「江匡房」。搜朗詠集餘句。具四韻上。至五月蟬聲

送麥秋①。遍索全詩未得。或視一詩云。是也。江看未過曰。

是手詎可便作此佳句。不采。後購得其本。果假作也。人服其

鑒。

〔書き下し文〕

承保中、江匡房に詔して、朗詠集の餘句を搜し、四韻を具して上せし

『大東世語』「識鑒」篇注釈稿（堀）

む。「五月蟬聲 麥秋を送る」に至りて、遍く全詩を索むるに未だ得

ず。或るひと一詩を視して云ふ、「是なり」と。江看て未だ過ぎずし

て曰はく、「是の手詎ぞ便ち此の佳句を作るべけんや」と。采らず。

後に購して其の本を得たり。果たして假作なり。人其の鑒に服す。

〔訳文〕

承保年間に、大江匡房に詔して、『和漢朗詠集』に摘句された詩の残

りの句を搜しだし、四韻（八句）をそろえて献上させた。「五月の蟬

の声は麥秋を送る」の句の番になり、詩句のすべてを搜し求めたが見

つからなかった。ある人が一つの詩を見て、「これだ」と言った。匡

房はご覧になると、目を通し終わらないうちに言った、「この手の詠

作者では、どうしてこの良い句を作れるだろうか」と。採用しなかつ

た。後に本となる詩篇を搜し得て、果たしてある人の示した詩篇は偽

物であった。人々はその目利きに感服した。

〔原注〕

①李嘉祐詩。

〔書き下し文〕

①李嘉祐の詩なり。

〔訳文〕

①李嘉祐の詩である。

〔語釈〕

承保 白河天皇朝の年号。一〇四七〜一〇七七。

江匡房 大江匡房。一〇四一〜一一二一。平安後期の貴族、学者。匡

衡の曾孫。江帥と称される。（言語12）「語釈」「江匡房」参照。  
朗詠集 『和漢朗詠集』。藤原公任撰。全二卷。寛弘九年（一〇一二）頃の成立。白楽天、菅原文時らの漢詩文の佳句を五八八首（多くは七言二句）とり、紀貫之・柿本人麻呂らの和歌二一六首を添える。春・夏・秋・冬・雑に分類し、朗詠の用に供した。佳句麗藻の集として広く愛読された。

五月蟬聲送麥秋 李嘉祐の詩句。『和漢朗詠集』の上巻・夏・蟬に見える。また、『和漢朗詠集』の先駆けとなった『千載佳句』の上巻・四時部・夏興・一二七に「千峰鳥路含梅雨、五月蟬聲送麥秋」の句が見える。詩題は「発青泥店、至長余県西涯山口」。  
『千載佳句』は大江維時編の漢詩集。全二卷。天曆頃成立。唐の詩人一五三人の七言詩一〇八三首から二句ずつ抜き出し、部門ごとに分類したもの。この詩句をめぐっては、植木久行『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（八）（『中国詩文論叢』第十四集、一九九五年十月）に詳密な考証がなされることを付記する。

〔典拠〕

『今鏡』「すべらぎの中」。「もみちのみかり」。

（大関 晶子）

〔識鑒11〕

源義家。從父將軍①。東征十二年。平奥而還。詣宇治公。話征戰事。江帥側聞之。先退出。私自言。渠有將才。惜未知兵

道。時義家從者。聽得而恚。待其主出而告之。義家曰。此公必有教。追及謹請。遂執弟子禮。受兵書。後寛治中。拜將征奥武衡。方攻金澤城。行見鷹正將下。忽復亂過去。曰。是江公所教。必當有伏。令軍避過。果賊數百在其野②。

〔書き下し文〕

源義家、父將軍に従ひて、東征すること十二年、奥を平らげて還る。宇治公に詣り、征戰の事を語る。江帥側にして之を聞き、先に退き出づ。私に自ら言ふ、「渠將才有り。惜しむらくは未だ兵の道を知らず」と。時に義家の從者、聽き得て恚り、其の主の出づるを待ちて之れを告ぐ。義家曰はく、「此の公必ず教ふこと有らん」と。追ひて及びて謹みて請ふ。遂に弟子の禮を執りて兵書を受く。後に寛治中、將に拜して奥の武衡を征つ。金澤城を攻むるに方りて、行ゆく鷹正に將に下りんとして、忽ち復た亂れて過ぎ去るを見る。曰はく、「是れ江公の教ふる所、必ず當に伏有るべし」と。軍をして避けて過ぎしむ。果たして賊數百其の野に在り。

〔訳文〕

源義家は、父である將軍頼家に従つて東征すること十二年、奥州を平定して都に帰還した。宇治公（藤原頼通）のもとへ参上し、征戰の事を語った。大江匡房は側でこれを聞いており、先に退出した。そっと独り言を言うことには、「彼には將軍としての才能がある。惜しむらくはまだ戰の方法を知らない」と。時に、義家の從者が聞きつけて腹を立て、その主が出てくるのを待つてこのことを知らせた。義家は、

「このお方はきつとご教示下さることがあるに違いない」と言って、追いついて行って謹んで教えを請うた。かくして弟子の礼をとって兵書の教えを受けた。その後、寛治年間に、將軍の任を授かって奥州の清原武衡を征伐した。折しも金澤城を攻めるにあたり、道すがら雁がちようど今にも地上に降り立とうとするも、たちまち乱れ飛んで過ぎ去って行くのを見た。義家が言うことには、「これは江公（匡房）の教えて下さったことだ。必ずや伏兵がいるはずだ」と。軍に命じてその地を避けて通過させた。果たして賊兵数百人がその広野にはいたのだった。

#### 〔原注〕

① 頼義。左馬頭源頼信之子。陸奥守鎮守府將軍。永承中奥安貞任反。詔頼義以征東大將軍。率東諸州兵征討。凡十二年克平。

② 孫子曰。鳥起者伏也。

#### 〔書き下し文〕

① 頼義なり。左馬頭源頼信の子にして、陸奥守鎮守府將軍なり。永承中に奥の安貞任反く。頼義に詔するに征東大將軍を以てす。東の諸州の兵を率ゐて征討す。凡そ十二年にして克く平らぐ。

② 孫子に曰く、「鳥起つは伏なり」と。

#### 〔訳文〕

① 頼義である。左馬頭源頼信の子で、陸奥守鎮守府將軍であった。永承年間に奥州の安倍貞任が反乱を起こした。天皇は頼義に詔して征東大將軍に任命した。東国の諸州の兵を率いて討伐に向かった。

およそ十二年で平定できた。

② 『孫子』に、「鳥が飛び立つのは伏兵がいるからだ」とある。

#### 〔語釈〕

源義家 一〇三九―一〇六六。平安後期の武將。頼義の長男。通称は八幡太郎。前九年の役の武功により出羽守に任命。永保三年（一〇八三）陸奥守兼鎮守府將軍となり、後三年の役を平定したが、朝廷はこれを私闘とし功賞を行わず、私財をもって将士を勞つて東国に源氏の基礎を築いた。

頼義 源頼義。九八八―一〇七五。平安中期の武將。頼信の子。名將の聞こえ高く、安倍頼時・貞任父子の反乱に前後九年の長きに渡つて戦い、遂にこれを平定。東国源氏の勢を強化した。

源頼信 九六八―一〇四八。平安中期の武將。満仲の子で河内源氏の祖。左馬權守、各地の守を歴任し鎮守府將軍となった。

安貞任 安倍貞任。一〇一九―一〇六二。平安後期の陸奥北上川流域の豪族。父頼時から陸奥岩手郡を譲られ、前九年の役には厨川柵に抛り、天喜五年（一〇五七）源頼義の軍を破ったが、康平五年（一〇六二）清原武則・光頼の援助を得た頼義に殺された。

征東大將軍 征夷大將軍の別称。本来は蝦夷征伐のため任せられた臨時の官。

宇治公 藤原頼通。九九〇―一〇七四。平安中期の公卿。摂政・関白。従一位。道長の子。後一条・後朱雀・後冷泉三代の天皇の摂政。

関白。父道長と並んで藤原氏全盛期を現出したが、天皇外戚となりえず、摂関家の後退を招いた。出家後、宇治に平等院鳳凰堂を建立し、宇治の関白、あるいは宇治殿と称された。

征戦 戦いにおもむくこと。

江帥 大江匡房。（「識鑒」10）「語釈」「江匡房」参照。

渠 かれ。あの人。三人称を表す。

兵道 用兵の術。

悲 いかる。腹を立てる。

謹請 謹んで請い求めること。

兵書 戦をする方法や戦術を書いた書。

武衡 清原武衡。？一〇八七。平安後期の武將。武則の子。後三年の役の後半の中心人物。甥の家衡が沼柵で清衡・源義家の軍を撃退すると家衡に加担し、金沢柵に拠って抗戦を主張。敗れて降伏を願ったが、許されず殺された。

金澤城 金沢柵。前九年・後三年の役の舞台となった。

伏 伏兵。

孫子 中国春秋時代の思想家孫武の作とされる兵法書。「孫子の兵法」とも。全十三編。『孫子』行軍篇に「鳥起者伏也。」とある。

〔典故〕

『古今著聞集』第九 武勇第十二「源義家、大江匡房に兵法を學ぶ事」

（第三三七話）

（上原 菜摘子）

〔識鑒 12〕

九層塔修。或云。上層金造。竊以牛皮換焉。帝①命佛工某。登視信否。某乃登半而下。懲懼殊甚。乃流淚謂人曰。躬且不暇。安能盡層。而辨其黑白耶。乃奉公。亦但爲身爾。寧復甘受不遂之命之罪。上憐其癡狀。笑不罪。其事亦復。時人皆言。凌雲之懼。故應爾爾。藤顯隆曰。伊故自作此。令監者免罪。其愚不可及也。

〔書き下し文〕

九層の塔修す。或るひと云ふ、「上層の金造、竊かに牛皮を以て換ふ」と。帝 佛工某に命じ、登りて信否を視しむ。某乃ち登ること半ばにして下り、懲懼殊に甚だし。乃ち涙を流して人に謂ひて曰はく、「躬すら且つ暇あらず。安くんぞ能く層を盡くして、其の黑白を辨ぜんや。乃ち公に奉ずる、亦た但だ身の爲のみ。寧ろ復た命を遂げざるの罪を甘受せん」と。上 其の癡狀を憐み、笑ひて罪せず。其の事も亦た復む。時人皆言ふ、「凌雲の懼れ、故より應に爾爾たるべし」と。藤顯隆曰はく、「伊れ故らに自ら此れを作して、監者をして罪を免れしむ。其の愚は及ぶべからざるなり」と。

〔訳文〕

（法勝寺の）九重の塔を修理した。ある人が言うことには、「上の階層の金物は、こっそりと牛皮を用いて作り換えた」と。白河帝は仏工の某に言いつけ、登ってそれが本当か否か調べさせた。仏工の某はそこ

で塔に登ったが、半ば程で降りてきた。ひどくおそれている様子だった。(某は)かくして涙を流して、人に言った、「自分の身さえ保つゆとりがありません。どうして塔の上層まで全うし、その白黒をつけることができませんか(いやできない)。こうして帝にお仕えしますのはただ自分の身のためだけです。命令を成し遂げなかった罪を甘んじてお受けします」と。白河帝はその愚かしい状態を気の毒に思い、笑って罰を科さず、その事は沙汰止みになった。その当時の人々は皆言った、「凌雲台に上った恐怖というのは、もともとこうしたものなのだろう」と。藤原顕隆は言った、「彼がわざと愚かしい事をして、工事を監督した者の罪を免れさせたのだ。その愚かしい行いは並々ではないものだ」と。

〔原注〕

①白河帝。

〔書き下し文〕

①白河帝なり。

〔訳文〕

①白河天皇である。

〔語釈〕

九層塔 白河天皇の勅願によって建立された白河(現在の岡崎公園、

京都市動物園付近)の法勝寺の八角九重の塔。

竊 窃かに、こっそりと。

佛工 仏工。仏像彫刻師。

白河帝 白河天皇。一〇五三―一二二九。後三条天皇の第一皇子。仏教を信じ、法勝寺などを建立した。〔言語12〕〔語釈〕「白河帝」

参照。

懲懼 おそれる。

黑白 良いこと悪いこと。是非。

辨 弁ず。区別をつける。はじめをつける。

癡狀 愚かしい姿。

凌雲之懼 凌雲は、「雲をしのいで高く聳える」の意。魏の明帝が建

てた高樓に凌雲台があり、誤ってこの樓の額の字を書かずに打

ちつけたので、能書家の韋誕は籠で引き上げられて額の字を書

いた。下りた時には恐怖と心労で韋誕の頭髮が白くなっていた

という故事(唐・張懷瓘『書斷』所載の「韋誕」。『太平広記』

卷二〇六「書一」「韋誕」は『書法録』を引く。)を踏まえる。

爾爾 然り然り。

藤原顯隆 藤原顯隆。一〇七二―一二二九。藤原為房の次男。白河上皇

の側近として権勢をふるい、「よるの関白」とあだ名された。

通称は葉室中納言。

監者 看守人。番人。ここでは塔の工事を監督した者。

〔典拠〕

『十訓抄』第一〇―七十七話。

(松本 豊)

〔識鑒13〕

妙音相國曰。頃來妓舞中。忽有「白拍子」①。其曲用「商音」。其舞數  
數仰首。作「愁訴狀」。殆是亡國之樂也。世何翫之甚。

〔書き下し文〕

妙音相國曰はく、「頃來妓舞の中、忽ち白拍子有り。其の曲 商音を  
用ふ。其の舞數數首を仰ぎて、愁訴の狀を作す。殆んど是れ亡国の樂  
なり。世 何ぞ翫ぶの甚だしき」と。

〔訳文〕

妙音相國（藤原師長）が言うには、「このごろ妓舞の中ににわかに白  
拍子が現れた。その曲には商音が用いられている。その舞いはしばし  
ば頭を上げて愁訴の狀をする。殆どこれは亡国の音楽である。世間で  
はどうしてこれほど愛好するのか」と。

〔原注〕

①世傳。白拍子。自天仁中起。初倡者烏帽佩刀。作丈夫裝。後以其  
態不驕。不用帽刀。著水干衣舞。又云藤通憲作其曲。教妓令歌舞之。

〔書き下し文〕

①世に伝ふ、「白拍子、天仁中自り起くる。初め倡者 烏帽・佩刀  
して、丈夫の装いを作す。後に其の態の驕ならざるを以て、帽刀を  
用ゐず。水干の衣を着けて舞ふ」と。又た云ふ、「藤通憲其の曲を  
作る。妓をして之れを歌舞せしむ」と。

〔訳文〕

①世俗では次のように伝えている。「白拍子は、天仁年間に起こり、  
最初は娼妓が烏帽子に刀を帯びて、男性の装いをした。後にこの風  
体では艶麗でないもので、烏帽子と刀を用いなくなり、水干の衣装を  
着けて舞った」と。また、「藤原通憲がその曲を作り、妓女に歌い  
舞わせた」とも伝えている。

〔語釈〕

妙音相國 藤原師長。一一三八～一二九二。頼長の子。太政大臣に至  
るが、平清盛により尾張に配流、数年後許されて帰る。琵琶に  
秀で、『仁智要録』『三五要録』『馬節会鈔』等の著がある。『千  
載和歌集』の作家。〔言語25〕〔語釈〕「妙音公」参照。

頃來 この頃。

白拍子 平安時代末期から鎌倉時代にかけて行われた歌舞。

藤通憲 藤原通憲。生没年未詳。後白河の四朝に仕えて少納言となる。  
平治の乱で信賴等に殺される。古今の典籍に通じる。『続後撰  
集』の作家。

商音 悲しい音で、亡国の音と言われる。五音（宮・商・角・徵・羽）  
の一つ。

〔典拠〕

『續古事談』『臣節』第二十三話。

（前篇 卓）

〔識鑒14〕

天台座主明雲①。問「相者」曰。身亦有「兵仗之厄」乎。相者曰。有之。

或問何以知之。曰。公身故應「無傷害之畏」。而今問如斯。是乃其兆耳。果中「流矢」而没②。

〔書き下し文〕

天台座主明雲、相者に問ひて曰はく、「身も亦た兵仗の厄有りや」と。相者曰はく、「之れ有り」と。或いは問ふ、「何を以て之れを知る」と。曰はく、「公の身故より應に傷害の畏れ無かるべし。而して今問ふこと斯くの如し。是れ乃ち其の兆のみ」と。果たして流矢に中りて没す。

〔訳文〕

天台座主明雲は、相者に問うて言った、「私にも武器による災いがあるだろうか」と。相者は言った、「あります」と。また問うことには、「どうしてそのことがわかるのか」と。相者が言うことには、「あなたの身はもとと損なう心配はないはずです。それなのに今このようにお尋ねになりました。これこそその兆候に外なりません」と。果たして明雲は流れ矢に当たって亡くなった。

〔原注〕

①久我相國源雅實之孫。六條大納言顯通之子。

②安倍親占「明雲」曰。以「陰陽占」視之。明是日月。而下被「雲障」。不祥。明雲後問「藤通憲」。有「兵禍之相」乎。藤通憲答云云。

〔書き下し文〕

①久我相國源雅實の孫、六條大納言顯通の子なり。

②安倍親 明雲を占ひて曰はく、「陰陽の占を以て之れを視るに、明は是れ日月なり。而して下は雲に障らる。不祥なり」と。明雲後

に藤通憲に問ふ、「兵禍の相有りや」と。藤通憲答ふること云云。

〔訳文〕

①久我相國源雅實の孫、六條大納言顯通の子である。

②安倍泰親が明雲を占って言うことには、「陰陽の占でもって視ると、『明』の字は日と月です。それなのにその下は雲に遮られています。縁起が良くありません」と。明雲は後に藤原通憲に、「兵乱による災いの相はあるだろうか」と問うた。藤原通憲はこのように答えた。

〔語釈〕

座主 天台宗の長。

明雲 一一一五―一一八四。平安末期の僧。天台座主。治承元年（一一七七）山門僧兵の強訴の責任を問われ伊豆流罪の途中、僧兵により近江粟津で奪還された。治承三年（一一七九）再び座主、寿永元年（一一八一）には大僧正に就任。法住寺殿に参詣中に源義仲の兵の流れ矢に当たり没した。

源雅實 一〇五九―一二二七。平安末期の公卿。村上源氏。右大臣顯房の子。源氏として太政大臣になった最初の人物で、久我太政大臣と称された。

顯通 源顯通。右大臣源顯房の孫、太政大臣雅實の子。保安三年（一一二二）に権大納言。

相者 人相・家相を見て占う人。  
兵仗 武器。兵器。いくさ道具。

厄 災い。災厄。厄難。

傷害 怪我。

安泰親 安倍泰親。一一一〇—一一八三。平安後期の陰陽家。安倍清明の血統をひく。安倍泰長の子。雅楽頭、陰陽博士、陰陽助、大膳権大夫を歴任、正四位上に上る。養和二年（一一八二）に陰陽頭兼大膳権大夫。天文学の根本を究め、占いがよく的中したことで有名であった。

陰陽 陰と陽。陰陽道は、古代中国の陰陽五行説に基づき陰陽の二氣と五行（木火土金水の五元素）の相生・相勝・相成の法則によつて天文・暦数・相地などを扱う術。

障 さえぎる。邪魔になる。

禍 災い。

藤通憲 藤原通憲。〔識鑒13〕〔語釈〕「藤通憲」参照。

〔典拠〕

『徒然草』第一四六段。『平家物語』第二卷「座主流」。

（上原 菜摘子）

〔識鑒15〕

松公攝政①。取<sub>二</sub>秦兼國<sub>一</sub>補<sub>二</sub>府官闕<sub>一</sub>。番長下毛敦景。譜<sub>二</sub>兼國<sub>一</sub>。公問<sub>二</sub>其瑕<sub>一</sub>。敦景曰。兼國家貧。躬自穿<sub>二</sub>井於後圃<sub>一</sub>。公曰。如是適足以信<sub>二</sub>無<sub>一</sub>他可<sub>レ</sub>毀也。遂用<sub>レ</sub>之。

〔書き下し文〕

松公攝政、秦兼國を取りて府官の闕に補す。番長下毛敦景、兼國を譜る。公其の瑕を問ふ。敦景曰はく、「兼國 家貧しくして、躬<sub>みづか</sub>自ら井を後圃に穿つ」と。公曰はく、「是くの如きは適<sub>まさ</sub>に以て他の毀<sub>そし</sub>るべき無きを信ずるに足るなり」と。遂に之れを用ゐる。

〔訳文〕

摂政の松公（藤原基房）は、秦兼國を選んで、国府の官吏の欠員に任命した。すると、左近番長の下野敦景が兼國の悪口を言った。松公はその欠点を問うた。敦景は、「兼國は家が貧しく、自分で井戸を家の後方の庭に掘りました」と言った。松公は、「そうであれば、まさに兼國にはそしるべき他の欠点が無いと信じるに足ることだ」と言った。かくして兼國を任用した。

〔原注〕

①基房。相國藤忠實之孫。法性相國忠通之子。攝政關白太政大臣。號<sub>二</sub>松公<sub>一</sub>。

〔書き下し文〕

①基房なり。相國藤忠實の孫、法性相國忠通の子なり。攝政關白太政大臣にして、松公と號す。

〔訳文〕

①基房のことである。関白藤原忠實の孫で、法相寺関白藤原忠通の子である。摂政関白太政大臣となり、松公（松殿）と号した。

〔語釈〕

松公 藤原基房の号。



攝政 君主に代わって政務を行なうこと。またその官。

藤原基房 一一四五―一二三一。平安末・鎌倉初期の公卿。松殿。兄

の基実に次いで摂政・氏長者になる。

秦兼國 後白河院の隨身。弓矢の上手。

補 官職の欠員を補充する。

府官 国府の官吏。特に大宰府の役人。

闕 欠員。

番長 左近番長。近臣。

下毛敦景 下野敦景。藤原基房の雇用人。

譖 悪く言う。偽る。

瑕 傷。欠点。短所。

躬自 みずから。

後圃 家の後方の畑、菜園。

如是 「是の如きは」と訓じているが、文脈上、仮定の意味に改めて

訓読した。

毀 貶す。評判をぶち壊す。

藤原忠實 一〇七八―一一六二。平安末期の貴族。師通の長男。氏長

者・関白・摂政。長子忠通と不和で、次子の頼長を偏愛した。

藤原忠通 一〇九七―一一六四。忠實の子。摂政関白・太政大臣。父

や弟の頼長と対立したが、保元の乱後また氏長者となる。

関白 天皇を補佐して政務を執り行なった重職。

太政大臣 太政官の最高位にある官。

〔典故〕

『古今著聞集』第五一七話「秦兼國、攝籙松殿基房の春日詣に供奉、

官人に召さるる事」。

（青木 悠）

〔識鑒 16〕

石橋之敗。源公①從七騎逃。既入總。兵復來集。然猶未滿五千。上總平弘常。是總豪族。懼向不速應。分兵爲擊不服者。遂統萬餘騎。詣幕謁。公未即出見。令土肥謂其遲滯曰。姑且在後軍。待指麾從事。弘常退謂人曰。公敗後。兵猶寡。今吾率萬餘騎來會。若凡庸人。必當咄咄喜迎。不遑好言。今爾貴讓不有。公誠天授也。他日爲天下大將軍。必矣。

〔書き下し文〕

石橋の敗に、源公 七騎を從へて逃る。既に總に入る。兵復た來たり集まる。然れども猶ほ未だ五千に滿たず。上總の平弘常、是れ總の豪族なり。向に速やかに應ぜざることを懼れ、兵を分けて爲に服さざる者を撃つ。遂に萬餘騎を統べて、幕に詣りて謁す。公未だ即ち出でて見ず。土肥をして其の遲滯を諷諭せしめて曰はく、「姑且く後軍に在りて、指麾を待ちて事に從へ」と。弘常退きて人に謂ひて曰はく、「公の敗後 兵猶ほ寡し。今吾 萬餘騎を率ゐて來會す。凡庸の人の若きは、必ず當に咄咄として喜び迎へ、好言に違あらざるべし。今爾く貴讓して宥せず。公は誠に天授なり。他日 天下の大將軍と爲らんこと必せり」と。

〔訳文〕

石橋山の戦いに敗れ、源頼朝は七騎を従えて逃れた。上総国に入ると、味方の兵がまた集まってきた。しかしまだ五千には満たない。上総の平弘常は上総の豪族であったが、前の戦いで速やかに馳せ参じなかったことを危惧し、兵を分けて頼朝公のために服従しないものを撃った。こうして一万騎余りを統率して、頼朝公の幕に参じて謁見した。頼朝公はすぐにはお出ましにならず、土肥次郎にその遅滞を責めなじらせて、「とりあえずは後陣に控えて、指揮を待ち命令に従え」と伝えた。弘常は退いて、人に言った、「頼朝公は敗れて、兵の数はいまだ少ない。今私は一万もの兵を率いてやってきた。並の人ならば、声をあげて喜び迎え入れ、賛辞の言葉が絶えないだろう。今頼朝公はこのように遅参をせめてお許しにならない。公は本当に天授の才をお持ちである。いつの日か天下の大將軍になることは必定である」と。

〔原注〕

①頼朝。

〔書き下し文〕

①頼朝なり。

〔訳文〕

①頼朝である。

〔語釈〕

石橋之敗 石橋は石橋山を指す。治承四年(一一八〇)に源頼朝が伊豆に挙兵して、大庭景親らの兵と戦ったがあえなく敗れた。

源公 源頼朝。一一四七―一一九九。鎌倉幕府初代將軍。平治の乱

(一一五九)の後、捕らわれ伊豆に配流された。その間、北条時宗の娘、政子と結婚。治承四年(一一八〇)、平氏追討の以仁王の令旨を受け挙兵。相模石橋山では敗れたが、安房に逃れ三浦・千葉氏らと合流。武蔵を経て鎌倉に入り政権を樹立する。

〔德行11〕〔語釈〕「頼朝」参照。

上總 地名。国名。今の千葉県の中央部あたりを指す。

平弘常 ? 一一八三。平安後期の武將で、上総権介常澄の子。上総・

下総(一部)の支配権を上総権介の地位と共に継承した最有力在庁官人。治承四年(一一八〇)の源頼朝挙兵に大群を率いて従い、同年常陸の佐竹氏討伐を進言する。

土肥 土肥次郎のこと。

誚讓 咎め、責めること。「誚」はそしる、「讓」はせめる、なじるの意。

姑且 とりあえず。しばらく。

指麾 指揮と同意。「麾」は軍隊の指揮者が持つ旗の意。

咄咄 声を出す擬声語。驚き発する声。

遲滯 遅参すること。

〔典拠〕

『源平盛衰記』卷第二十二「千葉足利催促の事」。(大関 晶子)